アリストテレス政治学の基本用語「ポリテウマ」について

荒 木 勝

- 一 訳語をめぐる問題状況
- 二 テキストの解釈―諸注釈にもとづく
- 三 ポリテウマのラティカル・センス
- 四 E・パーカーの訳語の意義
―ポリテウマの統一的理解をめざして―

一 訳語をめぐる問題状況

我が国におけるアリストテレス『政治学』の翻訳書は、原典からの翻訳としては、山本光雄訳（岩波書店、一九六八年）、部分訳ではあるが、重要部分を翻訳している田中美知太郎監訳（中央公論『世界の名著』八、一九七九年）、そして、古いものであるが、翻訳として先駆的業績である青木巖訳『国家学』（東京第一書房、一九三七年）が挙げられる。

これらの翻訳書は、どれもギリシャ語固有の含意を日本語に移し入れるという困難をそれぞれの仕方でも乗り越えようとした一個の作品としての価値を有しているが、そのような作業はまた訳語の不統一をもたらしたことも確か

である。

アリストテレス『政治学』の最も基本的な用語「ポリテイア」*politikos (politika)*の翻訳に「国制」、「共和制」、「国憲」、「国家体制」の訳語が与えられていることがそうした事情の一端を示しているといってもよいであろう。このような訳語の不統一という問題は、我が国だけでなく、欧米のアリストテレス翻訳の上にも生じており、そこからアリストテレス『政治学』の理解にも微妙なズレが生じているようにも思われる。

本稿は、「ポリテイア」*politikos (politika)*と密接な関連をもつ、もう一つの用語「ポリテウマ」*politikos (polituma)*についての訳語のズレの検討を通じて、この「ポリテウマ」の語としてのラディカル・センスを統一的に把握し、アリストテレス『政治学』の理解の一つの試みに与らうとするものである。¹⁾

さて、「ポリテウマ」の語がアリストテレスの『政治学』(以下、単に『政治学』と記す。)の中に用いられている箇所は、筆者の確認したところ、一九箇所である。この一九箇所に対して、山本訳は一貫して「国民団」の訳語を与えているが、田中訳は「国務遂行機関(政府)」、「国事に参与する人」、「政府」、「政権」、「国政に参与する資格を有する人々」、「公職有資格者階層」、「国事担当資格者」、「公職につきうる有資格者」の訳語が与えられている。つまり、ここでは、ほぼ三つの語義が区別して使用されているといえる。①国政の遂行機関としての政府、ないしは政権、②公職に就く資格を有する人々ないし階層、③国政に参加する資格を有する人々ないし階層。青木訳では、「政府」、「政治の参与者」、「支配階級」、「政治に携わる人々」、「参政権のある者」、「政府の成員」の訳が与えられており、先の田中訳における三つの語義が、田中訳とはちがった箇所それぞれ訳し分けられている。

こうした事情は、英訳、独訳、仏訳でも同様であり、E・バーカーの英訳がほぼ一貫して「シウィク・ボディ(civic body)」と訳出している他は、ジョウエット・ロス訳(オックスフォード版)、ロエフ版のラッカム訳はそれぞれ「政府」「government」「支配階級に属する人々」「those who are in the governing class」「支配階級」「ruling class」

「国家に属するすべての人々」「all the people in the state」「市民階級全体」「the whole citizen class」「支配団体全体」「the whole governing body」の言葉で訳し分けており、一九九〇年代以降に出版されているヘルリン・アカデミー版のドイツ語訳も、それぞれ「市民(階層)」「Bürgerschaft」「最高権力」「höchste Macht」「統治(行政)官職」「Regierungsamt」「権力保持者」「Machtaber」「統治団体」「regierende Körperschaft」「支配階層」「die regierende Schicht」の言葉で訳し分けられている。またビューデー版のジャン・オボネのアリストテレス『政治学』の仏訳も「政府」「le gouvernement」「政治体」「le corps politique」「統治階級」「la classe dirigeante」「統治者」「dirigeants」「統治権力」「la puissance gouvernementale」と訳し分けられている。それでは、この「ポリテウマ」の語がこのように訳し分けられている理由は、どこにあるのであろうか。またこのような分節化された語義を持つと思われる「ポリテウマ」なる語のラディカル・センスは何であるのか。以下、アリストテレスのテキストに則して検討することとしよう。

(1) ここでいう「ラディカル・センス」とは、ある特定の言葉が持っている中核的意味を指す。いうまでもなく、いかなる言葉も、それぞれ多義的意味を持っているが、その多義的意味をその多義性を残しつつ、一定の統一した意味連合に統合している中核的意味をもっていると考えられる。アリストテレスの『形而上学』Δ(第五卷)は、筆者にはそうしたラディカル・センス把握の一つの典型を提示しているように思われる。Aristotelis *Metaphysica*. recog. W. Jaeger. (Oxford, 1957) p. 86-120. アリストテレス『形而上学』(岩波文庫、一九五九年)第五卷、なお、このようなフィロソフィカルな方法によるアリストテレス『政治学』へのアプローチとして、拙稿「アリストテレスにおける『自然』と『作為』」(名古屋大学法政論集第一五四号、一九九四年三月)を参照のこと。

(2) この点はE・レヴィの確認しているところである。アリストテレスの『政治学』の該当箇所を、ベッカー版『アリストテレス全集』の表示する数字を用いて表示すると、以下のようである。第三卷第六章(二二七八b一〇、一一)、第三卷第七章(二二七九a二六、二回)、第三卷第十三章(二二八三b二二、三二)、第四卷第六章(二二九三a一六、二四)、第四卷第十三章(二

二九七b一〇)、第五卷第二章(二三〇b二四)、第五卷第三章(二三〇b一七)、第五卷第四章(二三〇b二六)、第五卷第六章(二三〇五b三四、一三〇六a一四)、第五卷第八章(二三〇八a七、a一三)、第六卷第七章(二三二a二七、a三二)、第七卷第十四章(二三三二b三三)。²⁾ E. Lévy, "Politica et polituenna chez Aristote" in *Aristote et Athènes*, (Fribourg [Suisse], 1991, by M. Pierart.) なお本稿でのマリステレスのテキストの引用はW・ロス校訂のオックスフォード版に依るものとする。

(c) E. Barker. *The Politics of Aristotle*. (Oxford 1946). B. Jowett. *Politica in the Works of Aristotle*, vol. X. (Oxford 1921). H. Rackham. *Aristotle Politics in the Loeb Classical Library* (London 1950). E. Schürumpf. *Aristoteles Politik*, in *Aristoteles Werke*, B. 9. I (Berlin 1991), II (Berlin 1991), III (Berlin 1996). J. Aubonne, *Aristote Politique in Collection des Universités de France (Budé)*, t-I, t-II, t-III. (Paris, 1968-1989).

二 テキストの解釈

『政治学』の中で最初に「ポリテウマ」の語が登場する箇所は、第三卷第六章の次の文章である。

① 「国家体制とは、国家の中で、種々の統治職、とりわけすべてのものに対して最高の権限を有する統治職を組織し秩序づけるものである。というのはどこでもポリテウマこそ国家の最高の権限を有するものであるが、ポリテウマこそ国家体制そのものであるから。」³⁾

"*ἔστι δὲ πολιτεία πόλεως τάξις τῶν τε ἄλλων ἀρχῶν καὶ μάλιστα τῆς κρείστας πάντων. κρείστων μὲν γὰρ πάντων τὸ πολιτεία τῆς πόλεως, πολιτεία δ' ἔστιν ἡ πολιτεία.*" (1278 b. 8-11)

この箇所の「ポリテウマ」に対して、一方では山本氏やE・バーカー、独訳のシュトルンプは「市民団」、⁴⁾「市民

体「civic body」、¹²「市民階層」“Bürgerschicht”の訳を与え、他方で田中氏、青木氏、ジョウウェットロース、仏訳のオボネは、「国務遂行機関（政府）」、「政府」“government”、“le gouvernement”の訳を与えている。そこには、国家の最高の権力を有するものが、市民体（団）全体であるのか、それとも国家権力の遂行機関にあるのか、について解釈の相違があるようにも思われる。¹³

シュトルンプの注釈は、「ポリテウマ」なる語に多義的な意味があることを指摘しつつ、第三卷第六章の文脈を重視して、「市民階層」の訳を与えている。すなわちこの箇所は、「自由人」“ελευθερος”の内部での二つの階層のあり方が議論されているのであり、「自由人」の中で、国政への参加の権利を有する者のみが固有の意味での「市民」“πολιτης (politēs)”であるから、「ポリテウマ」はここでは「市民階層」を指すというのである。¹⁴

確かにアリストテレスは、第三卷の第一章で「市民」なる者の定義を試みている。それによれば、
 「市民とは、無条件的には、裁判と統治職に關与する者以外の何者でもないと規定しうる。」

“πολιτης δ' ἀπλῶς οὐδενὶ τῶν ἀλλῶν οὐσεταὶ μάλα ἢ τῶ μετεχειν κρισεως καὶ ἀρχης.” (1275 a. 22)
 また第一章の終りの部分でも繰り返しこの点が言及されている。

「従って、以上のことから、市民とは何であるかが明らかである。すなわち、評議に關わる統治職と裁判とに關与する権利を持つ者は、すでにそれでその国家の市民なのであり、端的に言えば、国家とは、このような市民の、生活上の独立自存を達せられる程に十分な規模の集団である。」

“τίς μὲν οὖν ἐστὶν ὁ πολιτης, ἐκ τούτων φανερόν. ὃ γὰρ ἐξουσία κοινωνεῖν ἀρχῆς βουλευτικῆς καὶ κριτικῆς, πολιτην ἤδη λεγομεν εἶναι ταύτης τῆς πόλεως, πόλιν δὲ τὸ τῶν τούτων πλήθος ἰκανόν πρὸς ἀνταρξαίαν ζωῆς, ὡς ἀπλῶς εἰπεῖν.” (1275 b. 17–21)

しかしこの両箇所において注意すべきことは、いずれも「端的にいえば」*artōs*なる限定が付されていることである。アリストテレスにおいては、「市民」なる語もやはり多義的な意味を持っていたのであって、第三卷第二章以下は、その点についての考察にあてられている。そこで問題になっているのは、「自由人」*eleutheros*でありながら、国政への参与権を有しない人々をどう位置づけるかであった。とくに第三卷第五章の手職人階層 *banauσtos* (*banausos*) をめぐる議論はこの点に関するアリストテレスの見解を把握するのに重要な箇所である。

アリストテレスは、まず市民である人の子供についての議論を展開し、それをいわば「未完成の市民」*politikos arelēns*と規定し、国家の中にも、「端的な市民」*politikos artōs*と並んで、「未完成な市民」も存在しうるとを指摘する。

“οὐδ' οἱ παῖδες ὠσπερ αὐτῶν πολῖται καὶ οἱ ἀνήρως, ἀλλ' οἱ μὲν ἀπλῶς οἱ δ' ἐξ ὑποθέσεως πολῖται μὲν γὰρ εἰσιν, ἀλλ' ἀρελεῖς.” (1278 a. 4-6)

「子供は大人と同じような資格において市民であるということはない。大人は端的に市民であるが、子供は条件付きの市民でしかない。すなわち、彼らは市民ではあるが、未完成の市民である。」

この議論を踏えて、手職人階級も、いわば「未完成の市民」の位置にあるものと位置づけている。そしてこの手職人階層が端的な意味での市民の位置を得るか否かは、国家体制の相違に基づくものとするのである。

“ἐρεῖ γὰρ πλείους εἶδη αἱ πολιτεῖαι, καὶ εἰδῆ πολιτῶν ἀναγκαῖον εἶναι πλείω, καὶ μάλιστα τοῦ ἀρχομένου πολίτου, ὅσ' ἐν μὲν τῇ πολιτείᾳ τοῦ βάνουσου ἀναγκαῖον εἶναι καὶ τοῦ θῆτα πολίτας, ἐν τῇ δ' ἀδύνατον.” (1278 a. 15-18)

「国家体制の種類が多数ある以上、市民の種類も、またとりわけ被統治者の市民の種類も多数あるのは当然である。従ってある国家体制においては、手職人階層も日雇い労働者も市民であるのは当然である。しかし他の国

家体制においてはそういうことはありえないのである。」

それゆえ、「完全な市民の身分を与えられていない者は、国家の成員であっても、居留民（メトイコイ）のような地位にあつたとされる。

“ὁμοῖον μέτοικος γὰρ ἐστὶν ὁ τοῦ τιμῶν μὴ μετέχων.” (1278 a. 38)

「荣誉の統治職に与らぬ者は、居留民のようである。」

国家の統治職や裁判に関与せぬ、このような市民は、アリストテレスにおいても他方で奴隷や居留民とちがって、国家成員としての私法上の権利や居住権を持つ者として、あるいは、民会や裁判へ部分的に関与することを許された者として、「自由民」と位置づけられている。¹⁴

先に述べたシュトルンプの見解は、以上に紹介したアリストテレスの市民規定の多義性に注目し、その上でまたアリストテレスの国家規定の二重性を指摘している。すなわち一方でアリストテレスの規定、「国家は、市民の共同的結合体である (ἐστὶ κοινωμία τῆς ἡ πόλις, ἐστὶ δὲ κοινωμία πολιτῶν πολιτείας)」を踏まえて、¹⁵ 他方で、「国家は自由人の共同的結合体である」¹⁶ ち *ἐστὶ κοινωμία τῶν ἐλευθέρων ἐστίν* (1979 a. 19) という規定に注目し、「ポリテウマ」は、「端的な意味での市民」の団体を意味している、とするのである。そしてこの「端的な意味での市民」の団体こそ、統治職と裁判に関与する権力を有する階層として国家の最高の権限を有するものであり、この完全市民階級の範囲・規模に応じて国家体制のあり方が定まる、と解釈されるのである。

他方、「政府」「統治者」と訳すオボネにおいては、「ポリテウマ」の語義を、「統治する市民の団体、統治者—政府」「l'ensemble des citoyens qui government, le gouvernement」としつつ、それが国家の最高の権限の所在を示すことを重視して、「統治者—政府」「le gouvernement」の訳語を与えている。¹⁷ ズゼミールもまたここでは、端的に「ポリテウマ」とは、国家の主権者を指していると解釈している。¹⁸ ジョウエットもまた、「ポリテウマ」を、「統治者、

すなわち、統治を行わしめている人々」“the government i. e. the persons through whom the government acts”とする。⁽²⁾

アリストテレスの「ポリテウマ」の語のこのような使用は、次の箇所においてもほぼ同様の文脈の中で使われている。

② “ἐπεὶ δὲ πολιτεία μὲν καὶ πολιτεύματα σημαίνει τούτων, πολιτεύματα δ’ ἐστὶ τὸ κύριον τῶν πόλεων, ἀνάγκη δ’ εἶναι κύριον ἢ ἕνα ἢ ὀλίγους ἢ τοὺς πολλούς, ὅταν μὲν ὁ εἷς ἢ οἱ ὀλίγοι ἢ οἱ πολλοὶ πρὸς τὸ κοινὸν συμφέρον ἔρχονται, ταύτας μὲν ὁρθὰς ἀγαθαῖον εἶναι τὰς πολιτείας, τὰς δὲ πρὸς τὸ ἴδιον ἢ τὸν ἑἰς ἢ τῶν ὀλίγων ἢ τὸν πλῆθος παρεκβάσεις.” (1279 a. 25-28)

「ところで、国家体制という言葉とポリテウマという言葉は同じものを意味しており、またポリテウマは国家において最高の権限を持つものであり、最高の権限を持つものは、一人か少数の者か多数の者である他ないのであるから、一人あるいは少数者あるいは多数者が公共全体の利益のために統治を行うならば、その時はこれらの国家体制は正しいものであるが、しかしこれに対して一人であれ少数者であれ多数者であれ、そのそれぞれの私利私欲のために統治を行うならば、それは逸脱した国家体制といわねばならない。」

この箇所もやはり二系列の訳語が与えられているところであり、一方では、「市民団体」「市民体」が、他方では「国務遂行機関・政府」「統治体」が訳語として与えられている。しかしこの箇所では、明確に「ポリテウマ」が国家の最高の権限を持つもの、“το κύριον τῶν πόλεων”とされているから、この二系列の訳語を統一的に理解しようとするれば、「市民体(団体)」なるものが、完全市民の団体であって、それが国家の最高の権力に関与している構

造を想定する他ないであろう。一八九四年の出版であるスゼミール・ヒックスの注釈が、この箇所注して、「今日のイギリスでは、ポリテウマは、国王、貴族、平民の間の下院選挙団体を含むもの」とし、「ポリテウマ」を、最高権力を保持する統治体（“governing body”）と解しているのも、このような理解の上に立っていると思われる。⁸⁾

しかしながらこの箇所注目すべき点は、「ポリテウマ」が国家の最高の権限の保持者であるとした上で、この担い手が、一人か少数か多数かでありうる、と規定していることである。完全な市民権を保持する集団が「自由民」のうちで、多数を占めたり、少数でしかなかったりする場合に想定しうる事態である。しかし、一人の人間が国家の最高の権限を保持した場合、その時にも、その担い手を「市民体」としての「ポリテウマ」として理解することは、非常に困難であると思われるからである。おそらくそのような問題が背景にあつて、ジョウエットロス訳や田中訳は、「ポリテウマ」の訳語を「政府」「国務遂行機関」と訳したのではなからうか。

しかしながら、以下で紹介する、『政治学』の中で「ポリテウマ」が使われている第三の箇所においては、以上のような解釈を許さない文章が存在している。そしてこの箇所は、W・L・ニューマン自身が『政治学』の他の箇所には見られない表現と述べている所である。

③ アリストテレスは、第三卷第十三章の中で、統治職を要求する人々の根拠として、人の卓越的力量や、富や、生れの良さや、数が生む力を挙げているが、そのいずれもが、必然的に単独者の支配を生む根拠となることを論じている。たとえば、富を根拠として統治職を要求する場合には、結局はただ一人の最高の富者が、他のすべての人々を統治する事態を生み出し、人の卓越的力量に基いて統治職を要求する場合には、その卓越的力量を持つ者が複数存在している場合には貴族制を生じさせるが、一人の人が他に際立って卓越した力量を持つ場合には、その人が統

治の最高の権限を掌握するという事態を生み出す。

このような文脈の中で、アリストテレスは「ポリテウマ」に言及しつつ、次のように、大衆による統治の主張を紹介している。

“*πάντα δὴ ταῦτ' εἴκοιτε φανερόν ποιεῖν ὅτι τούτων τῶν ὅρων οὐδεὶς ὀρθὸς ἐστίν, καθ' ὃν ἀξιόδοτον αὐτοὶ μὲν ἀρκεῖν τοὺς δ' ἄλλους ὑπὸ σφῶν ἀρχεσθῆαι πάντας, καὶ γὰρ δὴ καὶ πρὸς τοὺς κατ' ἀρετὴν ἀξιούοντας κυρίους εἶναι τοῦ πολιτεύματος. ὁμοίως δὲ καὶ τοὺς κατὰ νόον τοῦ εἶναι ἢ λέγειν τὰ πλεῖστα λόγων τιμὰ δίκαιον.*” (1283 b. 27-33)

「以上すべてのことは、彼らがそれぞれに、自分達こそが統治し、他の人々はすべて自分達によって統治されるのが当然であると主張するそれらの基準のどれ一つとして正しくないことを明らかにしているように思われる。というのは、事実たしかに卓越的力量を根拠に、ポリテウマに対して最高の権限を有することを要求する人々に対しても、大衆は、一定の正統な論拠をもって抗弁することができるであろうから。」

この箇所についてもやはり二系列の訳語が与えられているが、とりわけ注目すべきは、シュトルンプの訳である。下線部をシュトルンプは次のように訳している。

「人としての卓越した特性を根拠として、主権者として最高の権力を掌中にしたいという要求を掲げる人々に対して」

“*gegen diejenigen, die aufgrund von hoher menschlichen Qualität den Anspruch erheben, als Souverän die höchste Macht in Händen zu haben.*”⁵⁴

おそらくシュトルンプは、ここでの「ポリテウマ」を「最高の権力」とした上で、この「最高の権力」に対する

「クリオス: *κρῖνος*, kurios」では、「クリオス」もまた「最高の権限を有する」の語義である以上、意味をなさないと考えて、「ポリテウマ」の属格を受けるのは「クリオス」という語であるという文構造の解釈を取らず、「クリオス」を副詞的に解して「主権者として」: *als Souveran* と訳し、「ポリテウマ」の属格を所有の属格と解釈して、「最高の権力に属するものとなる」↓「最高の権力を掌中に収める」と解釈したように思われる。

しかしながら、このようなシュトルンプの解釈は、文構造の上から見て無理であり、やはり、この「クリオス」は「ポリテウマ」の属格を支配して、「ポリテウマ」に対して「最高の権限を有する者」と解釈すべきであろう。事実、ジョウエットやバーカー、オボネの訳もこうした解釈を踏まえたものである。

• ジョウエット訳

“To those who claim to be masters of the government on the ground of their excellence”

• ラツカム訳

“against those who claim to be sovereign over the government on account of virtue.”

• バーカー訳

“those who claim to be sovereign over the citizen body on the ground of goodness.”

• オボネ訳

“à ceux qui sésiment, du fait de leur vertu, en droit de gouverner le corps politique.”

しかしながら、このような解釈は、先に述べた「ポリテウマ」の解釈と齟齬をきたすように思われる。

②の箇所では、「ポリテウマ」は「国家において最高の権限を持つもの」と規定されているから、この「ポリテウマ」を支配する「最高の権限ある者」は存在しないはずである。それゆえ、とりわけバーカーのように「ポリテウ

マ」を「市民体」“civic body”と訳した上で、「この『市民体』を統治する最高の権限を要求する人々」と訳した場合、この「市民体」は、「最高の権限」に与らない「市民体」ということにならざるを得ないのである。この点はジョウエット訳やオボネ訳にも妥当する。このような理解が可能だとすれば、ここでの「ポリテウマ」は「完全市民」の団体というよりは、不完全市民を含む市民体、いいかえれば、潜在的に「完全市民」でありうる可能性をもった「自由人」を含む市民体ということになるであろう。少なくともこの③の箇所の使用法は、こうした「ポリテウマ」の二重の性格を想定しなければ合理的な解釈をすることができないのである。¹¹⁾

④ 第四卷第六章の二箇所の「ポリテウマ」にも今までに述べてきた二系列の訳が与えられているが、シュトルンブはこの後者の箇所に「統治官職」“regierungsamt”の訳を与えている。¹²⁾ (1293 a. 16, 24)

“ἐάν δὲ ὄν ἐλάττωτος ὦσιν οἱ τὰς οὐσίας ἔχοντες ἢ οἱ τὸ πρῶτον, πλείω δὲ, τὸ τῆς δευτέρας ἀλιγαλίας γίνεται εἶδος, μάλλον γὰρ ἰσχύοντες πλεονεκεῖν ἀξίονται, διὸ αἰτιοὶ μὲν αἰροῦνται ἐκ τῶν ἄλλων τοὺς εἰς τὸ πολιτεῦμα βαδίζοντας.” (1293 a. 21-24)

「しかし財産を持つ人々が、先の人々（寡頭制の第一の種類）よりもその数は少ないが、財産の額は多いという場合、寡頭制の第二の種類が現われる。実際彼らは他の人々より強力なので、より多くの特権を要求する。それゆえに統治官職^{ポリテウマ}に入るものを、他の人々のなかから自分の手を選び出す。」

ここでは「ポリテウマ」は、「最高の権限を有するもの」から「政府」、そして「統治官職」“Amt”を指す語へと、よりいっそう具体化されている。

⑤ 第四卷第十三章において、アリストテレスは、国家体制に参加する者の数について検討しているが、そこでは

その数を重装武具を有している者に限定すべきであると述べている。そしてその資格となる財産の額を「最大限と
 程度までなら国政に参加する人の数が、参加しない者の数より多くなるかを調べ、それを基準にして定めるべき」
 と述べた上で、貧しい人々は、統治職に与らなくとも侮辱されたり財産を奪われたりしなければ、むしろ平穩無事
 を望むものだとし、しかし民衆がこのように平穩であることはそう容易でないと述べ、次のように語っている。

“οὐ γὰρ δεῖ συμβάλειν κατίενας εἶναι τοὺς μετέχοντας τοῦ πολιτεύματος” (1297 b. 10)
 「なぜなら、ポリテウマに属している人が常に立派な人々であるとは限らないからである。」

この「ポリテウマ」に対しては、「統治階級」(ジョウエツト)「統治階級に属する人々」(ラツカム、オボネ)「政
 治的諸権利を有する人々」(バーカー)「政権」(田中)の訳が与えられているが、シュトルンプは「権力保持者」と
 訳し、前に述べた「統治官職」と同様に、「ポリテウマ」を権力の担い手としてより狭く解釈している。¹²⁾

⑥ アリストテレスは、第五卷第三章の冒頭において、内乱を引き起こす原因について分析している箇所¹³⁾で次のよ
 うに述べている。

「またある人(それが一人であるにせよ、複数であるにせよ)がその力において、国家、あるいはポリテウマ
 に属する権力に釣り合わない程強大である場合は、そうした優越が原因になって内乱が起こることがある。実際、
 君主制や閥族制が生じるのは、通常そうした状態からである。」(1302 b. 15-18)

“—οἱ ὑπεροχὴν δέ, ὅταν τις ἢ τῆ δύναμει μείζων (ἢ εἰς ἢ πλείους) ἢ κατὰ τὴν πόλιν καὶ τὴν
 δύναμιν τοῦ πολιτεύματος· γίνεσθαι γὰρ εἶσθε ἐκ τῶν τοιούτων μοναρχία ἢ δυναστεία.”

この箇所における「ポリテウマ」に対して、シュトルンプは「統治集団」「die regierende Körperschaft」の訳語を与えている。シュトルンプは、他の箇所では「市民階級」「Bürgerschaft」「統治官職」「das regierende Amt」「権力保持者」「Machthaber」の訳を与えているから、この箇所は、一つの権力保持者、一つの官職よりも広く、しかし「市民階級」というよりも狭い、権力を保持した「集団 (Körperschaft)」の意味を持つ用語を訳語として与えているのであろう。

ところでこの箇所は、国家における、いわば二重権力状況を指すものと解することもできるかもしれない。確かにこの箇所の文脈は内乱の原因を探求するところであり、単独の権力者の権力と市民団体の統治権力が相克し、前者が後者を圧倒する程の権力を持った場合、内乱が生じ、その結果、君主制や閥族制がもたらされると解することは文脈にも適合的である。

しかしながら、こうした理解はまた、今までに確認してきた「ポリテウマ」理解と若干のズレを生じさせることになる。②の箇所では、「ポリテウマ」は、国家において最高の権限を持つものとされているから、ここでは君主や閥族が「ポリテウマ」の担い手ということになるであろう。その場合には君主や閥族以外の「ポリテウマ」は解体されるということにならざるを得ない。しかしその時には、市民の共同的結合体としての国家の国家体制（ポリテイア）としての共同的性格も解体されざるを得なくなるのではなからうか。少なくともこのような問題が未解答のまま残らざるを得ないであろう。

⑦ 第五卷第六章において、アリストテレスは、寡頭制の体制変革について分析しているが、寡頭制の体制が変化する方式として、寡頭制の政治に与っている人々が大衆を煽動する場合を挙げて、次のように言う。

“ὅπου τὰ δικαστήρια μὴ ἐκ τοῦ πολιτευματος ἐστὶ—δημαγωγόντες γὰρ πρὸς τὰς κρίσεις μεταβάλλουσι τὴν πολιτείαν.” (1305 b. 34)

「このことは、法廷がポリテウマに属している人々だけからできているのではないところでも行われる。実際、判決のために民衆を煽動し、国家体制を变革する。」

この箇所については、バーカーも先に述べたように、「ポリテウマ」に対して「主権を有する市民体」¹⁴、sovereign civic body”の訳語を与えているし、シュトルンプも「統治階級」“die regierende Schicht”と訳し、オボネも「統治者達」“Les gouvernants”、シヨウエットも「統治者」“government”と訳している。従ってこの箇所の「ポリテウマ」が寡頭制という国家体制の中で、真に統治に関与している完全な市民の団体を指すものであることについては、ほぼ訳者達の見解は一致しているといつてよいであろう。

「ポリテウマ」が完全な市民の団体であることを指す箇所として、やはり先の第五卷第六章の箇所に続く文章を挙げることができる。

“καταλύονται δὲ καὶ ὅταν ἐν τῇ ὀλιγαρχίᾳ ἐτέραν ὀλιγαρχίαν ἐμποιοῦσιν. τοῦτο δ’ ἐστὶν ὅταν τοῦ παντὸς πολιτευματος ὀλιγοῦ ὄντος τῶν μεγίστων ἀρχῶν μὴ μετέχουσιν οἱ ὀλιγοὶ πάντες.” (1306 a. 14)

「しかし寡頭制は、人々がその寡頭制の中に、それとは別の寡頭制を作る場合にも解体する。すなわちポリテウマが全部として少数であるのに、さらにその少数の者すべてが、重要な統治職に与かるわけではない場合である。」

シュトルンプは、この箇所に関して、さらに明確に、「完全市民階級」*“Aktiv bürgerschaft”* の訳を与えているが、パーカーもジョウエットもそれぞれ「全市民体」*“whole citizen body”* 「全統治体」*“whole governing body”* の訳を与えている。¹⁵⁾

以上に挙げた箇所の他にも、第五卷第六章(1308 a. 7, 13)、第六卷第七章(1321 a. 27, 32)、第七卷第十四章(1332 p. 31)に「ポリテウマ」の語が使用されているが、これまで述べてきた二系例の訳語が、それぞれの訳者の理解に従って与えられている。

(1) 本稿では、さしあたり「ポリテイア」*“politiká”* (politeia) の訳語を「国家体制」とする。いうまでもなくこの「ポリテイア」の語も多義的内容を持つ語であって、国家の制度を意味するだけでなく、国家を成り立たせている市民権、精神、倫理をも含む語であり、その意味で「国体」という訳語は極めて優れた訳語であると思われるが、この「国体」という訳語を持った歴史的背景を考慮して、今は使用をひかえておくこととする。さらに「ポリテイア」がいかなる国家体制を含意しているのか、国家体制一般を指すのか、いわゆる「コンステイテューションリズム」*“constitutionalism”* の文脈で理解される国家体制を示す語なのか(寡頭制と民主制の混合体としての「ポリテイア」を別としても)についても、別稿で検討する予定である。

(2) ここでは「シヴィク・ボディ」*“civic body”* を「市民団」と訳すこととする。「ボディ」*“body”* は単なる団体の意味でなく「コルプス」*“corps”* 「体」の意味において理解されなければならない。その点については、O. Gierke, *Political Theories of the Middle Age*, translated by F. Maitland, (Cambridge 1958), p. 26.

(3) E. Schürumpf, *Politik*, B. II/III, (Berlin 1991), p. 447.

(4) Aristoteles *Athenaion Politia* (Bibliotheca Teubneriana 1994), p. 7, p. 42. 「女子相続人」*“ἐκκλησία”* 「両親とも市民から生まれた者」*“οἱ ἐξ ἀγορέων γεννηθέντες ἄστυ”* にいうところの民法上の市民 *“ἀστυ”* 「アストス」という規定。アリストテレス『アテナイ人の国制』(岩波文庫 一九八〇年)一五〇ページ、二二三ページの注を参照。なおこの点についての国制史の側からの古典的研究として V. Ehrenberg, *The Greek State* (London 1969) も参照しよう。

(5) J. Aubonnet, *Aristote Politique*, tII 1^{re} Partie, Livres III-IV, (Paris 1971), p. 230.

- (6) F. Susenhi, R. D. Hicks, *The Politics of Aristotle*. (London 1894), p. 381. スゼミールは、「ポリテウマ」を、「ポリスの統治階級」あるいは政府「The ruling class or government」とし、アリストテレスを「主権」sovereigntyの正確な観念を採用した最初の人であったとしている。
- (7) B. Jowett, *The Politics of Aristotle*, vol. II. (Oxford 1885), p. 122. ジョウエットによれば、ポリテウマ、ポリテイア、ポリスには、三つの意味上の階層がある。(1)ポリテウマは統治者。彼らによって統治がなされる。(2)ポリテイアは統治体。統治し、統治されるもの。(3)ポリスは統治体を含む国家全体。しかしこれらの意味は相互に移行する、とされる。
- (8) Susenhi, Hicks, op. cit., p. 412.
- (9) Schürumpf, op. cit., p. 73.
- (10) スゼミールはこの箇所を“control the governing body”「統治体をコントロールする」と訳している。しかしこの訳は、「タリオス」を「コントロール」と訳することによって、最高の権限を持つ主体の所在をあいまいにしている。この「コントロール」を主権的な権力によるコントロールと解せば、このスゼミールの解釈は、はじめはポリテウマが最高の権限を有する統治体であったが、一人ないしは複数の人物がその卓越的力量によって最高の権限を手に入れるという事態が生じた、ということの意味することになるであろう。もしその人物が一人であるならば、その場合には、一人の単独の主権者が存在することになって、ポリス国家は市民のコイノーニアとしての性格を失うことにもなるであろう。この点はまた、君主制・王制とポリテイアとの関係をどのように把握すべきか、という問題を提起する。
- (11) Schürumpf, op. cit., T. 3, p. 24.
- (12) Schürumpf, op. cit., T. 3, p. 35.
- (13) Schürumpf, op. cit., T. 3, p. 53.
- (14) Barker, op. cit., p. 218. Schürumpf, op. cit., T. 3, p. 35. Aubonnet, op. cit., T. II, Livres V-VI, p. 58, 1305, b 34.
- (15) Schürumpf, op. cit., T. 3, p. 62. Barker, op. cit., p. 219. Jowett, op. cit., 1306, a 14.

三 ポリテウマのラディカル・センス

以上の紹介から明らかなように、アリストテレスの「ポリテウマ」の語には多義的な訳語が与えられてきたが、この点についてはすでに、W・ルツペル Ruppel が一九二七年の論文「ポリテウマ」"Politeuma"において、「ポリテウマ」の語の語義の変遷を文献学的方法によって明らかにしている。また最近では、E・レヴィ Lévy が、一九九一年の論文「アリストテレスにおけるポリテイアとポリテウマ」"Politeia et politeuma chez Aristote"の中で、「ポリテイア」と「ポリテウマ」の語義の重なりと相違を検討することを通じて、「ポリテウマ」の語義を確定しようとしている。以下両氏の説を簡単に紹介しながら、「ポリテウマ」のラディカル・センスを整理してみることとしよう。

まず両氏とも、「ポリテウマ」が文献上登場する時期を紀元前四世紀後半以降とし、「ポリテイア」の語に比べて、その登場の新鮮さを指摘している。「ポリテウマ」の語が文献上確認される最も古い例は、イソクラテスの『アレオパギタ』中の文章であるが、そこでは、「ポリテウマ」には、「ポリテウエスタイ」"politeuestai"の名詞化されたものとして、「ポリリスにおける政治的实践」という語義が与えられている。

しかし他方で、「ポリテウマ」は、ほぼ同時代のプラトンによって、ただ一度だけ、しかもイソクラテスの使用法とは異なった意味において使われている。プラトンは『法律』の中で次のような文脈で「ポリテウマ」を用いている。

「というのは、諸々の統治職の執務監査を行う人々が、統治職にある者よりもすぐれた者であって、彼らがその仕事を非のうちどころのない正義によって、非のうちどころのない仕かたで果たすなら、国土と国家の全体は

榮えて幸福になるからです。だがもし、統治職に対する執務監査に関する仕事がそれとちがったやり方で行われるなら、その時には、すべての政治的諸組織を一つに統合している正義の絆は断ち切られて、その結果、どの統治職もばらばらになり……」(『法律』第十二巻九四五—D)

“*ἄν μὲν γὰρ οἱ τοὺς ἀρχοντας ἐξευθύνουρες βελτίους ὡς ἐκεῖνοι, καὶ τοὺς ἐν δίκῃ ἀμεμεῖς τε καὶ ἀμέμπτως, ἢ πᾶσα οὕτω θάλλει τε καὶ ἐνδαιμονεῖ κωπα καὶ πολις· ἐὰν δ' ἀλλως τὰ περὶ τὰς εὐθύνων τῶν ἀρχόντων γιγνηται, τότε λυθείσης τῆς τὰ πάντα πολιτεῦματα συνεχοῦσης εἰς ἐν δίκης, ταύτη πᾶσα ἀρχὴ θεωρεῖται ὡς ἐτέρα ἀπ' ἄλλης, ……*” (945 d. 1-7, NOMON IB *Scribtorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis Platonis Opera*. t. v. p. 404.)

この箇所でも用いられている「ポリテウマ」の複数形は、国家の中の諸々の組織、たとえば統治職や役所、また諸々の市民層、が含意されている。

他方、「ポリテウマ」はデモステネスの演説の中で多用されているが、デモステネスにおいては、「ポリテウマ」は、むしろイソクラテスにおける使用法とほぼ同一の意味で使用されている。たとえば、次の箇所がそれを示している。

「アテナイ人の方々よ、私も三段櫓船の機装や合唱隊の費用の負担、寄附金や捕虜の身代金や慈善行為について語ることはできる。しかし、これらの行為については一言も語りたくはない。ただ次のように述べておきたい。私の行おうとする政策は、これらの人々の政策とは全く異なるものである……」。(Demosthenes, VIII, on the Chersonese 70-71).⁽⁵⁾

“*ἔχω, ὡ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, καὶ τρηπαρχίας εἰπεῖν καὶ κορηγίας καὶ κρημάτων εἰσφοράς καὶ λύσεις ἀρχαίωνων καὶ τοιαύτας ἄλλας φιλανθρωπίας, οἷδὲν ἔν τούτων εἰποιμὶ, ἀλλ' ὅτι τῶν τοιούτων*

πολιτευῆσθαι οὐδὲν πολιτεύουσαι, ……”

一六一

この箇所では「ポリテウマ」は、まさしく「ポリテウオー」「*politikos*」その中間態・不定詞「ポリテウエスタイ」「*politikos*」という動詞の名詞化されたものとして使用されている。「ポリテウオー」の語義が、「ポリス」*polis*の政治に関わること、あるいは「ポリテース」「*politai*」(「市民」)として行動すること、市民であることに置かれているとすれば、「ポリテウマ」はまさしく、「ポリス」の政治に関わること、すなわち政策、政治的実践を意味する言葉となるのである。

ルッペルは以上の他にも、アリストテレス以前のアッティカの演説家の使用方法として、「ポリテウマ」の語が「ポリテウア」*politikos* 政治組織、政府の意味で使われている例を挙げているが、いずれにしても「ポリテウマ」の語は、「ポリテウエスタイ」の動詞の名詞化されたものとしての語義を有するものであったといつてよいであろう。

しかしながら、ルッペルの論文においては、この「ポリテウマ」は、まさにアリストテレスにおいては、より多義的な語義を有するものと解釈されている。以下ルッペルの整理を紹介してみよう。

ルッペルはまずアリストテレスの「ポリテウマ」の語義を三つに区別している。⁶⁾

- (1) 「ポリテウマ」*politikos* 貴族、第一身分、完全市民。とくに第五卷第六章の一三〇五b三〇の文章、および一三〇六a十四の箇所の「ポリテウマ」は、権力を行使しうる市民層を意味していると解釈される。さらに、第五卷第八章の一三〇八a三―七の文章および一三〇八a一三―一五の文章では、「ポリテウマ」は「上流の人々」「貴族」を意味していると解釈されている。

- (2) 「統治の頂点に立つ人々」または「最高の権力」を持つ者。とくに第七卷第一四章の一三三二b引の文章に依拠し、またさらに第六卷第七章の一三二一a二六―三三に注目して、「ポリテウマ」に属する人々は、「最も

重要や統治職に就く人々”*“ai arxai ai kypiatatai, aĩ dei tous ev̄ tēi politikāi katechein.”*”と解釈される。

- (3) 「国家権力」あるいは「政府」「役所」。とくに第三巻第一三章の一二八三b二〇、同三〇の文章、また第四巻第六章の一二九三aに、同二二、第四巻第一三章の一二九七b一〇の箇所の解釈に「政府」と「役所」の語義を与えている。ここで注目すべき事は、ニューマンがとくに注記して、アリストテレスの用語法として例外的な文章とした第三巻第一三章の文章”*“pros tous kat’ apertu aghourtas kypious einai tou politikou”*”の解釈を「その卓越の性向の故に政府の最高権力を要求する人々に対して」とすることによって、文章上は一応整合的な理解を可能とした、という点である。

以上がルッペルのアリストテレスの「ポリテウマ」に関する整理であるが、ルッペルはさらにこの「ポリテウマ」の語義の変遷をアリストテレス以後の時代まで追跡している。とくにアリストテレスよりも二〇〇年後のポリビウスの使用法、およびそれ以後の種々の文書に残された「ポリテウマ」の語義をほぼ以下のように整理している。

- (1) 「都市」「都市住民の住む場所」。
- (2) 「レスプブリカ」、一定の統治形態としての国家。とりわけ抽象的な国家概念を指す言葉として用いられ、国家の具体的なあり方、制度、法制、組織についても「ポリテウマ」の語が使用される。
- (3) 新たな国家形態、とくに「連合国家」*“Statenbund”*、*“同盟国家”* *“Bundesstaat”* ならに、*“一国家、一都市内において、あたかも別国の都市民であるかのように一つの共同社会に組織された民族集団 (“integrae gentes seu nationes ita appellantur, quae societate inter se inita in unum quasi rei publicae corpus coaluerunt.”)* たとえばアレクサンドリアにおけるユダヤ人の民族集団が、「ポリテウマ」と呼ばれる。

以上がルッペルによる文献学的方法による「ポリテウマ」の語義の整理であるが、そこから浮び上ってきた「ポリテウマ」のラディカル・センスは、「ポリテウテスタイ」*“politeuesthai”* の名詞化としての語義、すなわち「ポリリスの政治に関わること(もの)」という意味である。「ポリリスに関わるもの」として、それは、政策、政治的原则、政治的行為を意味する場合もあれば、ポリリスの政治の担い手^{II}市民層を意味する場合もあり、またポリリスの政治に関わる役職を意味する場合もあった。またさらにヘレニズム期以降においては、ポリリス内における特定のエトニツシユな集団の、一定の自立的な市民団体を意味する場合もあった。

しかしながら、このような「ポリテウマ」の使用法の変遷の中でも、アリストテレスのそれは、政治学的な文脈において、とりわけ重要な意味を付加されたものであったといえよう。とくに「ポリテウマ」の意義が「最高の政治的権限」*“xunios”* (「クリオス」)との関係において論じられていることが重要である。アリストテレスの「ポリテウマ」が多くの場合、「完全市民層」の意味に用いられているのは、「完全市民層」のみがポリリスにおける最高の権限を有する主体であったからである。そこからさらにより具体的に「政府」とか「統治職」「役所」の意味が加わっていったと考えられる。

実際、アリストテレスは、前に紹介したように、『政治学』において、「ポリテウマ」を、まずなによりも「ポリリスの最高の権限を有するもの」^{II}「クリオス」と規定している。

「実際、どこにおいてもポリテウマは、ポリリスの(ポリリスを統治する―筆者)最高の権限を有するものである。」

“xunios hēn yāp pautaxōn tò politikōn tēs póleōs” (1278 b. 10)

従って、アリストテレスにおいては、この箇所では「ポリテウマ」は、ポリリスの市民層であったとしても、より厳密には、最高の権限の担い手でありうる市民層に限定されているように思われる。事実、この文章の直後に次のような主張が展開されている。

「ポリテウマこそポリテイアである。私が言おうとしているのは、まさに以下のようなことである。たとえば、民主制においては、民衆デモスこそが最高の権限を有する者であり、寡頭制においては、逆に少数の者が最高の権限を有する者である。」

“*πολιτεῦμα δ' ἔστιν ἡ πολιτεία. λέγω δ' οἷον ἐν μὲν ταῖς δημοκρατίαις κύριος ὁ δήμος, οἱ δ' ὀλίγοι τῶναρχοὶ ἐν ταῖς ἀλιγαρχίαις.*” (ibid.)

ここでは、「最高の権限を有する」市民＝完全市民の数は、民主制では多数であり、寡頭制では少数であるから、「ポリテウマ」の規模もその国家制度＝ポリテイアによって伸縮変化するものと捉えられているように思われる。

事実、「ポリテウマ」を、「最高の権限を有する者」：*κύριος*（＝「クリオス」）との関連で捉えようとするこうした視点は、『政治学』の他の箇所においても多く見られるところである。

第三巻第七章の一二七九a二六の文章を再確認することとしよう。

「ポリテイアとポリテウマとは同じことを意味しており、ポリテウマはポリスを統治する最高の権限を持っているもの（＝「クリオス」）であり、しかも最高の権限を有するものは、一人か少数の者か多数の者かである他ないのであるから、この一人か少数者か多数者が、社会共通の利益をめざして統治するならば、その時それらのポリテイアは正しいものであるにちがいない。しかし一人のあるいは少数者の、あるいは多数者の私的利益をめざして統治するならば、それらのポリテイアは逸脱したものとなる他ない。」

“*ἔπει δὲ πολιτεία μὲν καὶ πολιτεῦμα σημαίνει ταύτων, πολιτεῦμα δ' ἐστὶ τὸ κύριον τῶν πόλεων. ἀνάγκη δ' εἶναι κύριον ἢ ἕνα ἢ ὀλίγους ἢ τοὺς πολλοὺς, ὅταν μὲν ὁ εἷς ἢ οἱ ὀλίγοι ἢ οἱ πολλοὶ πρὸς τὸ κοινὸν συμφέρον ἀρχῶσι, ταύτας μὲν ὀρθῶς ἀγαγκάινει εἶναι τὰς πολιτείας, τὰς δὲ πρὸς τὸ ἴδιον ἢ τοῦ ἐνὸς ἢ τῶν ὀλίγων ἢ τοῦ πλήθους παρεκβάσεις.*”

この箇所の「ポリテウマ」に対して、田中訳も、ジョウエット・ロス説もラツカム訳も仏訳オボネ訳も、「政府」「国務遂行機関」という訳語を与えて、「最高の権限を持つ場」という意味を表面に押し出している。

こうした理解は、第三卷第十三章の一二八三b・二二一三一の文章に対して、最近のドイツ語訳者シュトルンプにおいても採用されていることは、本稿第二章すでに指摘しておいたところである。

さらに第四卷第六章の一二九三a十六―二四の文章も、「ポリテウマ」を「クリオス」との関連において理解すべき箇所である。

「ポリテウマに関わる人々が多数であるために、人間ではなくて法がクリオスにならねばならない。」

“*διὰ τὸ πλεθος εἶναι τῶν μετεχόντων τοῦ πολιτεύματος ἀνάγκη μὴ τοὺς ἀνθρώπους ἀλλὰ τὸν νόμον εἶναι κήρυον.*”

この文章は、寡頭制の第一の型を論じている箇所であり、ここでは、市民権に関与できる者が比較的多数であるため、政治の安定のために法律がクリオスでなければならない、と述べている所であるが、しかしその法の制定者は、寡頭制の国家体制に関与しうる完全市民の総体であるから、ある意味では、その完全市民体としてのポリテウマがクリオスであるといってもよいであろう。

こうして、アリストテレスの「ポリテウマ」の語義のラディカル・センスは、「ポリテイエスタイ」の名詞化されたものに加えて、「クリオス」の語義を包含したものと措定してもよいと思われる。従って、日本語による訳語を当てるとすれば「市民的統治体」ないしは、単に「統治体」という言葉がさしあたり妥当な訳語として考えられるであろう。そして主要にはアリストテレスにおいては、この「市民」は「完全市民」を意味したが、時には、潜在的な市民をも内包する文脈で使用されることもあった(第二章③の例)と思われる。

ところで、ルッペルを始めとするアリストテレスの文献学的研究や、欧米の『政治学』の翻訳者達の「ポリテウマ」理解はほぼこのような把握の上に、さらに文脈に応じて種々に訳しわけているのであるが、ただ一人E・バーカーのみは、「ポリテウマ」の訳語を、ほぼ「シヴィク・ボディ」「civic body」「市民体」一つに統一している。それはいかなる理由にもとづくのであろうか。

- (1) W. Ruppel, "Politeuma" in *Philologus*, 82 (1927) p. 268-312, 433-454.
- (2) E. Lévy, op. cit.,
- (3) Ruppel, op. cit., p. 269, Isocr. Areop. VII, 78.
- (4) 現行の岩波書店版『プラトン全集』一三巻の『法律』の訳は、この "ta pautā politikyarta" を「政治組織全体」と訳している。しかし(3)は複数形であることを看過してはならない。
- (5) Demosthenes, I (Loeb), On the Chersonese, 70-71, Ruppel, op. cit., p. 270.
- (6) Ruppel, op. cit., p. 273-275.
- (7) Ruppel, op. cit., p. 275-289.

四 E・バーカーの訳語の意義

E・バーカーがその翻訳書『アリストテレスの政治学』*The Politics of Aristotle*の中で、「ポリテウマ」に相当する訳語として、ほぼ一貫して「シヴィク・ボディ」(「市民体」)を採り、文脈に応じてその語に若干の修飾語を付けたことはすでに先で紹介したところである。

それでは、意識的ともいえる、この訳語の一貫性にはいかなる意味が込められているのであろうか。

この文脈において注目すべきはE・バーカーの翻訳書の中に収められている彼独自のフィロロギカルなギリシャ語解釈を含む序言的部分である。そこでバーカーは、「クリオス」: *κρίσις* のラディカル・センスを「確認・承認」*“confirmation”* 「承認・批准」*“ratification”* 「効力・正当性 (validity) を与える一般的措置」と措定する。¹⁾ その上でバーカーは、アリストテレスにおいては、「クリオス」の核心は、ポリスにおける「評議会」*“to bouleuómenon”* の中に求められる、というのである。確かにアリストテレスは『政治学』第四卷第十四章の終りで、

「国家体制の評議的部分、すなわちクリオスなるものについて」(1299 a. 1)

“περὶ μὲν οὖν τοῦ βουλευομένου καὶ τοῦ κρίσιος [δὲ] τῆς πολιτείας”

と言い、また第十五章の冒頭で、ポリスの政治に関する最重要な事務の最高の決定権を有するものは、ポリスにおける評議的部分である。と言っている。

「評議的部分は、戦争、平和、軍事同盟の締結と破棄に関して、また法に関して、また死刑、追放、財産没収に関して、また統治職の選出、およびその執務報告審査に関して、最高の権限を持っている。」(1298 a. 3-7)

“κύριον δ' ἐστὶ τὸ βουλευόμενον περὶ πολέμου καὶ εἰρήνης, καὶ συμμαχίας καὶ διαλύσεως, καὶ περὶ νόμων, καὶ περὶ θανάτου καὶ φυγῆς καὶ δημεύσεως, καὶ περὶ ἀρχῶν αἰρετέως καὶ τῶν εἰθνηῶν.”

さらにアリストテレスは、この「評議的部分」に、すべての市民が与かり、最高の権限を有することに関する国家体制「を民主制的なものとし、「ある特定の、限られた人々がすべてのことについて評議する国家体制」を寡頭制的としている。

「市民のすべてが、すべてのことについて評議し決定権を持つのが、民主制である。」(1298 a. 10)

“τὸ μὲν οὖν πάντας καὶ περὶ πάντων δημοτικόν.”

「ある特定の人々が凡てのことについて評議し決定するのが、寡頭制である。」(1298 a. 34)

“τὸ δὲ τινὰς περὶ πάντων ὀλιγαρχικόν.”

いずれにしても、市民が参加する評議的部分が、「クリオス」なるものであるとすれば、「市民体」こそが「クリオス」であるとする理解も十分に可能であろう。もしそうであれば、「ポリテウマ」は「クリオス」であるとするアリストテレスの文章から、「ポリテウマ」は「市民体」である、とする理解を引き出すこともできるはずである。バーカーのアリストテレスはおよそ以上のようなアリストテレス理解の上に立っていると思われる。

バーカーが「ポリテウマ」の訳語に「役所」「役人」「政府」「最高の権力保持者」の訳を採らず、ほぼ一貫して「市民体」「ないし」「主権的市民体」「sovereign civic body」「市民体総体」「whole civic body」「general body of citizens」の訳語を与えた背景には、このようなバーカーのアリストテレス理解が横わっているように思われる。

さらに翻って、バーカーのアリストテレス研究の基本視角に光をあててみるならば、バーカーは、アリストテレス政治思想の普遍的意義をその「コンステイテューションリズム」「Constitutionalism」の中に見い出している。その「コンステイテューションリズム」の核心は、「市民体」によって形成された国家、および、市民体によって作成された法の主権性に置かれている。このような政治思想は、バーカーによれば、アリストテレスからトマス・アクィナスに流れ込み、トマスからリチャード・フーカーへと流れ、このフーカーからロックへと伝えられた、いわばホッグ的政治思想であった。もしバーカーのアリストテレス研究の基本視角がこのようなものであるとすれば、バーカーが「ポリテウマ」の訳語に「市民体」の語を一貫して採用したことの中にバーカーのアリストテレス像の明確な思想的位相を読み取ることもあながち不当ではなからう。

しかしながら、問題は残されている。アリストテレスにおける「クリオス」のラディカル・センスを、バーカーの示した「評議における最高決定・是認」と理解してよいのであろうか。「クリオス」を単独支配者の中にも見ていることは、今までで紹介してきたアリストテレスの文章、および、シュトルンプをはじめとするこれまでのアリス

トテレス研究者がすでに指摘しているところであるが、この点はアリストテレスの君主論、王論の中に、否定しなくては明示されているのである。ここに、君主制論の中の「クリオス」概念のさらなる明確化こそが次なる検討課題となるであろう。

「王制の第五の種類は、王が一人ですべての事柄に対して最高の権限を持っている場合である。それはちょうどそれぞれの民族や国家が公共的な事柄に対して最高の権限を持っているようなものである。これは家長的統治に対応するものである。」(1285 b. 29-31)

“*μητρον δ' εἶδος βασιλείας, ὅταν ἡ πάντων κύριος εἰς ἅν, ὡς τε οὐρανὸν ἕκαστον ἐβηος καὶ πόλις ἕκαστη τῶν κοινῶν, τεταγμένη κατὰ τὴν οἰκονομικῆν.*”

- (1) Barker, op. cit., introduction p. lxxvii.
- (2) Barker, op. cit., introduction p. lxi.
- (3) Barker, op. cit., introduction p. lxi-lxii.
- (4) この点はまたバーカーの「アルケー」：“*αρχή*”の語義の把握についても指摘しうるところである。バーカーは、「アルケー」が「統治・支配」という意味を持つのは、ギリシャ人が政治的権威の根源を、政治的行為の起点としてのイニシアティブ・指導性に求めたからであるとしている。たしかにこの理解は、自由な市民間における政治的統治の性格を把握するには都合の良いものであろう。しかしながら、アリストテレスにおいては、「アルケー」は常に二重のものとして理解されていたのである。一方における奴隷主的支配、他方における自由人による自由人の統治たる市民的支配が表裏の如く把握されているのである。そして奴隷主的支配においては、支配する側のイニシアティブ・指導性は必要とされず、支配される者としての奴隷の一方的服従が要求されるだけであった。しかもアリストテレスにおいては、この奴隷主的支配は単なる家政内の奴隷支配に限定されず、ある一定の君主制的支配を特徴づける言葉としても使用されている。さらにまたこの奴隷主的支配を受ける奴隷についても、奴隷にふさわしい奴隷的精神の問題としては、アジア人の性格の問題として取り上げられており、またより一般的に、人間精神の奴隷的性向の問題として取り上げられている。